

研究プロジェクト「奥行きを感じる」2019 年度活動報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中ハシ, 克シゲ, 富田, 直秀, 藤田, 一郎, 小島, 徳朗, 藤原, 隆男, 重松, あゆみ, 礪波, 恵昭, 竹浪, 遠, 深谷, 訓子, 岩城, 見一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000301

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



研究プロジェクト「奥行き感覚」2019年度活動報告

Research Project “The Sense of Depth” — Activity Report of the 2019 Academic Year

研究代表者：中ハシクシゲ（京都市立芸術大学）

研究分担者：富田直秀（京都大学）、藤田一郎（大阪大学）、小島徳朗（京都市立芸術大学）

連携研究者：藤原隆男、重松あゆみ、礪波恵昭、竹浪遠、深谷訓子（京都市立芸術大学）、
岩城見一（元京都国立近代美術館館長）

Principal Investigator: Katsushige Nakahashi (Kyoto City University of Arts)

Co-Investigators (Kenkyu-Buntansha): Naohide Tomita (Kyoto University), Ichiro Fujita (Osaka University), Tokuro Kojima (Kyoto City University of Arts)

Co-Investigators (Renkei-Kenkyusha): Takao Fujiwara, Ayumi Shigematsu, Keisyo Tonami, Haruka Takenami, Michiko Fukaya (Kyoto City University of Arts), Ken'ichi Iwaki (Ex-Director of The National Museum of Modern Art, Kyoto)

本研究は JSPS 科研費 16H03384 の助成を受けたものです。

はじめに

本研究プロジェクト全体の狙いは、造形芸術作品の評価に際してしばしば評言のひとつとして用いられる「奥行」や「奥行き感」という観点を手がかりに、古今東西の諸作品を再検討すること、ひいてはそこから、「造形の質」という美術の本質とかがわっているにもかかわらず言語化の困難な側面に関する理解を深めることである。

研究も4年目となり、これまでに縄文土器、洞窟絵画、マティスのカットアウト作品など、様々な時代、ジャンルの作品を実見し、考察を加え、課題化して実際に制作し、検証を行ってきた（その概要については、『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第61～63号を参照されたい）。

以下、本稿では、昨年度報告の際に（研修旅行報告を除き）取り上げなかった2018年度後期課題の「東西の風景画」について、その過程を紹介する。また、この風景画に関する考察と、以前から特に中ハシを中心に続けてきた日本における彫刻の「奥行き感覚」の探求が、ここにきて日本庭園という新たな対象に収束することになった。こうした観点から、2019年度前期には、授業においても日本庭園を主たる対象とした。さらに、夏期休業期間中に、ジャコモッティの《ディエゴ》（豊田市美術館）ならびに長野県下の縄文土器の実見調査を行った

め、最後にその研修旅行についても報告する。ちなみに、本年度後期にはジャコモッティ作品に見られる奥行き感の検証から出発した課題を行っているが、本稿執筆時点ではまだ授業が終了していないこともあり、この課題についての報告は稿を改めて行うこととする。

また、科研の最終年度も目前に迫り、個々の考察については別途報告書用の文章を用意していることもあり、今回の報告は記録的なものに留まることもあらかじめお断りしておきたい。

1. 2018年度後期テーマ演習「奥行の感覚」授業報告「東西の風景画」から考える奥行き感覚

■ 東洋絵画、西洋絵画において、空間そのものの奥行き感覚を如何なる手段で表してきたか

これまでに本研究で扱ってきた作品群は、彫刻作品や縄文土器、洞窟絵画（動物画）、マティスのカットアウト作品など、どちらかといえば求心的な形態がその周囲にはらむ空間性や奥行き感覚が問題になるものだった。そのため、今年度前期は、空間そのものの奥行き感覚が、複数の要素を用いて如何に表現されてきたか、あるいは如何に表現／感知されうるかということを考えるために、空間自体が主題となるジャンル、すなわち風景表現を取り上げることにした。

【10月4日】ガイダンス

参加者：学生12名、教員6名

場所：新研究棟共同講義室2

まず、これまでの研究内容を踏まえて、本テーマ演習で考察する「奥行の感覚」とは如何なるものかということに関する説明を行ったうえで、それぞれの受講者が、「奥行の感覚」を選択した動機などを中心に自己紹介を行った。今回は西洋の風景画と東洋の山水画を「東西の風景表現」としてテーマとすることに決まり、西洋については国立国際美術館の「プーシキン美術館展」を、東洋については大阪市立美術館の「生誕150周年記念 阿部房次郎と中国書画」展を見学することにした。

【10月18日】プーシキン美術館展を見ての感想ほか

参加者：学生10名、教員6名

場所：新研究棟共同講義室2

2018年7月21日～10月14日の会期中、国立国際美術館で「プーシキン美術館展－旅するフランス風景画」が開催されていたため、最終日までに各自がプーシキン美術館展を見学してくることとし、授業ではまず、展覧会見学の感想を自由に述べ合うところから始めた。そのうえで、第二段階目として、課題を考案するための手がかかりとなる言葉を皆で抽出する作業を行った。しかし、17世紀から20世紀までの幅の広い風景画が出品されていた展覧会だったため、受講者ごとに当然挙げる作品が異なり、着眼点も様々で、議論がまとまりを取るまでにはやや時間を要した。そのなかで印象に残ったのは、特にパリ旅行などの経験がある学生が、自身の「記憶」に引きつけてパリの街角を描いた作品などに反応していたことで、絵画と記憶の共鳴という論点が挙がってきた。また、複数の学生が強い奥行きの感覚を覚えたとして挙げた作品がクールベの《水車小屋》【図1】であったが、本作は画面上部中央やや右方に見えるごく僅かな空の部分を除けば、比較的近距離にあるモチーフで画面が占められている作品であるだけに、意外な結果のようにも感じられた。おそらく画面を構成する明部と暗部の切替えが巧みに行われていることや、画面手前に流れてくる水の出所が水車小屋と画面奥の建物との間に設定されており、自然とそこに空間の存在を認識させられることなどが要因かと思われた。17世紀の作例に関しては、意外にも線遠近法的な規則にそこまで厳密に従っておらず、実は強引に面を接合させている箇所などが、全体の描写の調整で巧みに隠されていることなども指摘された。また会場の最後の方に展示されていた、ボナー

ルの《夏、ダンス》(202×254cm)などに関しては、近くによると一目では認識しがたくなる画面の大きさと、それゆえに画面のなかに引き込まれるような奥行き感の指摘があり、画面との視距離の問題も話題となった。

【10月25日】

参加者：学生9名、教員4名

場所：新研究棟共同講義室2

前回の作業を進め、さらに言葉を絞り込んでいった。考えてみたい論点として、「風景画を風景画たらしめているものは何か」、「臨場感の所在」、「実感を生みだす歪み」、「絵の中に入る感覚」、「パッチワーク（異時同図法）」、「個人的な風格」、「視点・焦点のばらつき」、「作者の意図しなかったこと」、「旅の記憶」、「実感に基づく絵画独特の遠近法」などの言葉が挙げられた。実感、さらにその実感を照らし合わせる根拠となる記憶ということが鍵のように思われた。その結果、課題は次のような内容とした。すなわち、各自が大学内あるいは近隣で撮影した風景写真を持ち寄り、議論して一箇所を選択する。その後、その場所に行って、各自が自分の記憶とクロスさせながら描くというものである。

【11月1日】

参加者：学生9名、教員6名

場所：大学キャンパス内

前回決定したとおり、外に出かけて風景の撮影を行った。その後、撮影した画像をもとに議論を行い、皆が日頃から馴染んでいる学内の池の周りを選定して制作に入った【図2】。



図1 ギュスターヴ・クールベ《水車小屋》
75×100cm、プーシキン美術館



図2 池の周りで風景画を制作

【11月8日】

参加者：学生10名、教員5名

場所：大学キャンパス内、新研究棟共同講義室2

ひとりひとりの制作に区切りを付け、講評に移る。それぞれの作品にはそれなりの着眼点や考えがあったが【図3】【図4】、キーワードとした「記憶」という言葉がやや曖昧で、人によって発展させる方向があまりにも違うため、検証のための課題には向かなかったかもしれないという結論に至った。

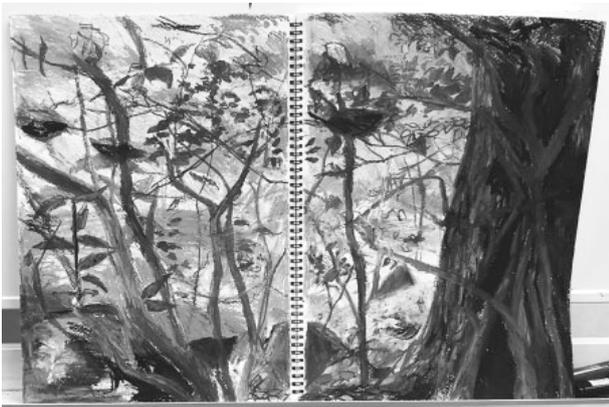


図3 クレヨン等を用いた受講者作品

■ 大阪市立美術館「阿部房次郎と中国書画」見学

【11月15日】

参加者：学生10名、教員6名 場所：大阪市立美術館

西洋の風景画に引き続き、中国の山水画を作品に即して検討するため、大阪市立美術館で開催中の「阿部房次郎と中国書画」展を見学した。近代の実業家の阿部房次郎（1968～1937）が蒐集し、その没後に寄贈された中国書画コレクションについて、阿部氏の生誕150周年を記念する特集展示で、北宋・燕文貴「江山楼観図巻」、元・伝郭忠恕「明皇避暑宮図」など世界的に著名な山水画作品も多数含まれている。各自、自由に作品を見学し、終了後は展覧会の感想をまとめたレポートが課された。

【11月22日～26日】

台湾・故宮博物院研修旅行（昨年度の研究紀要の報告に記載）

【11月29日】

参加者：学生8名、教員6名

場所：新研究棟 共同講義室2

この日の授業は二部構成をとり、まず本学日本画専攻で中国絵画の研究や中国における制作経験も豊富な浅野均教授による、山水画の制作に関するレクチャーを開催した。そのうえで、後半では、今後の課題を考えるため、見学を踏まえてのディスカッションを行った。

浅野教授のレクチャーでは、まず八大山人「安晚帖」（泉屋博古館）の図版を示されて、実際の作品に宿る詩情に触れることを導入とし、簡単な課題として、白い紙を台形（山型）にカットしたもの（相似形）を大小2点用意し、それを各自が素描で描くことを行った【図5】。次いで、小型のペットボトルの内部を想像し、それを描くということも行った。これらの課題は、浅野教授自身の中国大陸旅行や西日本の洞窟でデッサンを重ねてきた体



図4 水彩による受講者作品

験がベースになっており、それぞれ、ものの大小を如何にして表すか、また例えば洞窟のような内部の閉鎖空間を描くときに取りうる方法が人によって如何に異なるかということ、実感を持って感じさせるための課題であった。さらに浅野教授がかつて中国で実際に描いたデッサンなども拝見しながら【図6】、船上でのデッサンの経験や線の力などについて話を伺った。



図5 台形の紙のデッサンを通して大きさの表現について考える



図6 実際のデッサンを見ながらのレクチャー

後半では、実技課題で検証するための論点の洗い出しを行った。これまでに学生たちには、大阪市立美術館における見学を踏まえ、それぞれの考えをレポートにまとめることが課されており、ディスカッションはそこで各人が挙げていた論点を中心に行われた。山水画に見られる奥行き感覚と結びつく要素として、特に意見が集中したのが、臥遊という概念に集約される画中での視線の経巡りや、それを可能にする視点の複数性、絵のなかに入り込んで歩き回る疑似体験的な感覚の創出方法などについてであった。また、画面内に詩などの書を伴うことも多い山水画は、そもそも詩をはじめとする文学的伝統の想起と密接に結びついたジャンルであるため、そのこ

とと結びつけて、やはり物語性や時間性に焦点を当てた意見も出された。造形的な観点からは、とくに西洋の絵画との大きな相違点として余白の扱いに注目する意見が多く見られたほか、西洋に比して極端な縦長、横長という画面形式の違いも指摘された。しかし時間内には課題の確定には至らず、ひとまず来週は決まり次第制作に取りかかれるように、各自使用したいモノクロームの画材を用意してくることにした。また、12月13日に、中国杭州に留学経験のある日本画領域博士課程在籍中の小林ちよの氏の経験談を伺うことに決めた。

【12月6日】

参加者：学生8名、教員5名

場所：新研究棟 共同講義室2

先週に引き続き、課題を考案するディスカッションを行った。当然のことながら山水畫の重要な特徴が何かという問題については、単独の要素に絞り込めるわけではないこともあり、できるだけ変数の少ない「検証のための課題」を設定することにしたものの、その議論も難航した。

比較的有力な候補として挙げられたのは、以下の3つの案であった。すなわち、「西洋風景画を山水畫にする」。「山水畫の要素を取り除いていってどうしても残さざるを得ない要素を確かめる」。「(倣)という概念から、とりあえず、代表的な山水畫の空間性だけを残して、そのほかの部分の自由にして描いてみる」。

話し合ううちに、とにかく手を動かしてみようということになり、范寛の《谿山行旅図》の実物大複製を教室の壁に掛け、それを観ながら実際に描いてみることを通じて、その空間性を調べてみることにした。各人がしばらく作業に没頭し、やはり実際に描いてみることでそれぞれに《谿山行旅図》のなかで特徴的な部分を新たに見出したり、再確認したりすることに繋がった。そうして見出した各自のポイントを検証してみるために、課題としては、各自が撮影した風景の写真を、山水畫の特徴を活かして絵に起こし、山水畫に見られる空間の奥行き感と近いところを目指してみるようになった。ただし実際に水墨で描く必要はなく、画材は自由だが、色彩はモノトーンで試みるようになった。

【12月13日】

参加者：学生9名、教員3名

場所：新研究棟 共同講義室2

先だって予定していたように、小林ちよの(号・玉雨)氏による「現代中国における山水畫の制作方法について」と題されたレクチャーが開催された。2017年に中国美術学院(浙江省杭州市)に留学し、中国山水畫の伝統技法

を重視した制作・指導を行っている林海鐘氏に学んだ写生法を中心に講義がなされた。実際に景観を巡って、山、岩、樹木、建築物などの空間の関係を把握し、それらを曖昧にせず描き出すことが重要であること。そのために透視図法ではなく、視点を移動させ絵画的に再構成する必要がある、その技法を、写生の具体例を交えて説明いただいた。講義を受けることで、山水画成立の初期において既に重視されていた「臥遊」（実際の山水景観を巡るようして絵画空間を鑑賞すること）の精神が脈々と受け継がれていることが理解できた。

その後、各自が持ってきた山水画制作のベースとする写真を紹介するとともに、その基本構図を黒板等に寸描して、方向性を確認、説明した。

【12月20日】

参加者：学生7名、教員4名
場所：新研究棟 共同講義室2

先週決定した方向に沿って、各自が制作を行った。年明け1月10日の15時から合評を行う予定とし、それまでは制作を進めることになった。【図7】

【1月10日】

参加者：学生11名、教員6名
場所：新研究棟 共同講義室2

15時まで制作の続きを行った後、元にした写真と完成作とを並べ、さらに各人の制作意図を聞きながら合評を行った【図8】【図9】。制作中の試みとしては、次のようなコメントが挙がった。「重なった部分を空白にして隙間を作り、近景、中景、遠景のレイヤーを作る」。「わざと西洋の風景写真を選び、范寛の構図を元に描く」。「背景をぼんやりさせる」。「正確な遠近を求めるのではなく、自分の感じた部分を強調する」。「絵の中に積極的に文章を入れる」。「路をつなげてゆくという工夫で自身が画中に



図7 写真を山水画に変換していく

入るような体験を創り出す」。「山水というからには水の部分を取り入れる」。総じて、客観的な観察というよりも、それに主観的思い入れをのせ、強調する部分と抜く部分（余白も含む）を創るという方法が多く取られていた。制作自体は面白かったという肯定的な意見が多く出されたが、各人が体得した感覚を言語化して再検証する時間をもてなかった。今回の風景画／山水画の見学や課題を踏まえた考察内容については、次年度に刊行予定の科研報告書において、あらためて論じる予定である。

2. 2019年度前期テーマ演習「奥行の感覚」授業報告 日本庭園に見る奥行き

■ 日本庭園に奥行きの感覚を探る

【4月18日】

参加者：学生43名、教員5名
場所：新研究棟 大会議室

これまで基本的に10名前後で推移してきた受講者数が43名と急増したため、まずはこの人数で可能な進め方を



図8 受講者の作品（横構図を縦構図に変えオレンジの単色で制作）



図9 受講者の作品
（水面に映る山や樹木を敢えて垂直に立てて幻想的な光景に）

考えなくてはいけないという事態になった。そこで、例年通り「奥行の感覚」という研究テーマの説明と、今回はとくに日本庭園に着目するということを決定した後は、学生を3グループに分けて進行することになった。

通常通り、やはり作品の実見を出発点としたいと考えたため、まずは見学先の候補を挙げ、絞り込んでいくことになった。曼殊院、無隣庵、天竜寺、祇王寺、西芳寺、平等院など様々な候補が挙がったが、大学からのアクセスや大人数での見学が可能である点なども踏まえ、庭で名高い天竜寺を全員で訪れることに決定した。また、ゴールデン・ウィークを中心に、受講者はできるだけ多くの庭園を訪れることが薦められ、3～5箇所を目安に見学しておくことを課題とした。

【4月25日】天竜寺庭園見学

参加者：学生40名、教員7名 場所：天竜寺

後醍醐天皇の菩提を弔うため、足利尊氏を開基とし、夢窓疎石を開山として暦応2年（1339年）に開かれた天竜寺は、池泉式の「曹源池庭園」【図10】でも名高く、今回の見学に相応しい。大学からも1時間ほどの近距離である。ただし見学の際には、歴史的な事項や庭園の特徴はいったん脇におき、実際に庭園のなかや庭園を望む建物のなかに身を置いた際に得られる実感に集中することを主眼とした。

【5月9日】庭園見学を振り返って ——ポイントの洗い出し

参加者：学生34名、教員6名

場所：新研究棟 大会議室、共同講義室1、2

連休中に訪ねた庭園のレポートを天竜寺の感想と合わ

せて提出させ、3班（A、B、C班）+教員班に分けて各自が訪れた庭園のお互いの感想を持ち寄り、それぞれの庭園の特徴から幾つかの分類に分けてみるよう提案した。

天竜寺の庭園については、次のような意見が出された。極めて単純で、楕円形の池と背景の借景との単純な視覚的効果を持っている。そのために、池の中央に口蓋垂（喉ちんこ）のような小さな半島と石を池の中に持ち出して、この単純な視覚構造に変化を与えている。主役のなくなった舞台のように思えた。正面の石組みは、確実に小さな滝（主役）があったに違いなく、その水音が歩いている時に、記憶の風景を思い起こさせるのでないかと思われた。入水路はよくわかるが排水路が隠されていた（中ハシ）。石などのスケールの大小を自在に使う空間を作っているように思えた。また池の輪郭、小川や小径の行き先を取って隠すことによって心理的な奥行きを生み出すことに貢献している（深谷）。天竜寺は元々ある地形を利用して借景はもとより、水源の引き方など作りやすいような場所に設営している。鑑賞が屋敷側からの視点に限られていて中国の庭園（テーマパーク風）とは異なっている（竹浪）。Googleマップを見ると元々左側に松が生えていた（今年の9月まで）のが倒れて、現在は取り去られていることがわかった（藤原）。回遊式の大きな庭園で、方丈の座敷の上座から見る位置がビューイングポイントらしいが、今回は大方丈の中央に柱があり、この場合は上座がポイントではないと思った。また張り出した庇によって上下で視界が切り取られていて、絵画とよく似ている仕組みがある。韓国の庭園（自然らしさを重視し、日本の見方からすると庭に見えない）とを比較すると興味深い（重松）。また、こうした感想を総括し

て、箱庭的な課題は避けたいという意見も出された（小島）。

学生の受講者からは、次のような意見が出された。

自然と人間との距離感から考えると、庭園はトリミングされていることによって、自然からは遠いけれども鑑賞者には見易くなっている。大きな松の配置は、わかりやすい遠近感を構成している。歩き回れる庭とビューポイントのある庭とが分類的にはあるけれども、それは重なっていて、鑑賞する側においては同じでないか（A班）。韓国の学生の意見が出て、韓国の庭との大きな違いが話題になった。韓国の庭は単なる自然のように見えるかもしれない、すなわち鑑賞者の意識の中に庭の美しさがあるかどうかに関わっている（B班）。



図10 天竜寺庭園

いろいろな庭はあるが、庭には水の存在が必ずあり、たとえ本当の水がなくても枯山水というものがある。細部に注目させて、その連続の中に奥行きがある（C班）。

■ 庭の何をもって奥行を考えるか？

【5月16日】課題考案のためのディスカッション

参加者：学生30名、教員6名

場所：新研究棟 大会議室、共同講義室1、2

3班に分かれて、課題の考案のためのディスカッションを行い【図11】、一定の案を取りまとめた後、全体で集まって、班ごとに考察のプロセスと課題案を報告した。



図11 キーワードなどを書き出しながらディスカッションを行う

【5月30日】

参加者：学生28名、教員6名

場所：新研究棟 大会議室、共同講義室1、2

五芸祭による休講を経たこと、また教育実習に行く学生が多くいたことなどから、参加者が少なめの週となる。前回の課題提案を受けて、まずはA班が考案した課題を行うことになった。課題の内容は、まず大学の構内で、各自が「庭の空間」だと感じた領域を写真で撮影する。そこから、不必要だと感じる部分をトリミングして切り取って、庭の空間を伝える写真を生み出す、というものである。その際、ただ視覚的なそれらしさを追い求める

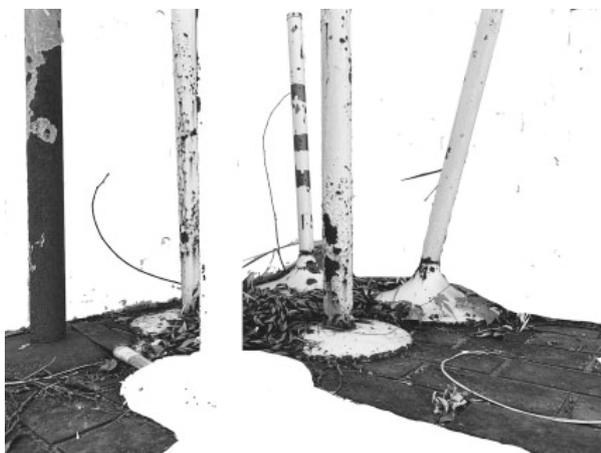


図12 不要と感じた部分を白抜きに

ことに終始しないよう、何らかの「感覚」に結びつく言葉を、テーマとして前もって設定しておき、そのテーマに適った感覚を伝えるような作品を目指すことになった。

テーマは、各受講者が考えたものから幾つかを選定し、各自がそのなかから好きなものを選択することとした。テーマとして設定された言葉は以下の通りである。

テーマ【お題】一覧

「いけないものを踏んでしまった予感」、「眠りから覚める夢と現実の狭間の空間」、「手のひらに触感がくっきり感じられる空間」、「午前4時の空気感から連想される空間」、「調和と対立の交わる場所」、「足の臭さから反対に連想される良い匂いの空間と距離感」、「コンビニ袋に詰め込みたくなる空間」、「身を隠す形」、「目頭が熱くなる空間」、「黒洞（ブラックホール）」、「パノラマの角度を探す」、「午前3時熱帯」、「二重性のあるリアル」、「必死になれば必死になるほど」、「大地のあくび」、「グレイ（gray）」、「三ツ矢サイダーのかおる」、「ふり・かけ・る」、「ハエトリグモにじっと見つめられるような距離感」、「芋虫が葉を齧る音から連想されるもの」、「曲がってもとの位置に戻る空間」

制作時間は短めに設定し、15時半までにメール送信の形で制作したイメージを提出してもらい、プロジェクターを用いて合評を行った【図12】【図13】。提出された作品のなかには、極めて美しいものも散見され、かなり限られた時間のなかで写真を撮りそれを加工する今の学生たちの技術の高さとそれに適した感性には驚かされた。一方で、庭園の課題という観点からすると、庭園のもつ複合的な要素や立体性が捨象され、あくまでも平面的な課題になってしまっているという印象が強い。

■ 4つの立方体が生み出す調和的空間

【6月6日】

参加者：学生24名、教員4名

場所：新研究棟 大会議室

最初に前回の講評の残りをを行った。総じて、面白い優



図13 路の向こうの緑とトリミング部の黒の対比が鮮やかな作品

れたイメージが出来てきてはいるものの、先述のようにこれらの作品は、庭園の「奥行の感覚」という問題には直結しないように思われた。またテーマとして与えられた言葉が余りに主観的な解釈に開かれたものであることも、課題の理解を一部で難しいものにしてしまったという感が否めなかった。

そのため、中ハシからの提案で、次は立体的な課題を行うこととした。課題の概要は次の通り。一辺が100ミリの石膏の立方体4個を、一直線上に等間隔（間隔は自由）に並べる。この4個の立体が、一体感を持つ調和的空間を創り出すように、立方体に加工を加える。加工の仕方は自由であるが、それぞれ当初の100ミリの立方体の枠を超えてはならない。庭園のなかに存在する岩や植生などの立体物が相互の関係で生み出す調和的空間の奥行を探ることが目的の課題である。ここでは、とくに石組みの問題が強く意識されている。

具体的に用意する学生の持参物は＋ドライバー各1本、カッターナイフ、ノコギリ刃（あれば）、スプーン大1（石膏攪拌用）、サンドペーパー（100番くらい）、ステンレスボール1ケ、45Lビニール袋2枚、ビニール手袋、金槌。教員が用意するものは、100x100x100 mm 石膏木型ケース80個、タガネ45本、太釘45本、石膏25キロ×3袋、ブルーシート、ポリバケツ4ケ、台車など。

【6月13日】

参加者：学生24名、教員4名

場所：新研究棟 大会議室 → 彫刻棟裏手

中ハシが用意した石膏木型ケースを用いて【図14】、一辺100ミリの立方体を各自が最低4つ作る必要があり、石膏の溶き方等の説明を受けた後、各自が作業に当たった。



図14 用意された石膏木型

【6月20日】

参加者：学生21名、教員4名 場所：彫刻棟裏手

前回に引き続き、石膏の立方体を作る作業から始まった。十分に乾いた石膏の立方体を加工する作業に移行する受講者も増え、立方体をおくための台として30×90cmの板も各自に配付した。しかし石膏を扱い慣れた受講者は少なく、思い通りの加工が難しいばかりか、単に削るだけでも結構な力を要して作業は難航した。しかしお互いの進捗を見ながら時間をかけて作業するなかで【図15】、偶然がもたらす形の効果や、空間性を生み出す方法等について、徐々にではあるが感じることに、考えることが出てきはじめている様子が窺えた。



図15 作業中の様子

【6月27日】

参加者：学生19名、教員5名 場所：彫刻棟裏手

引き続き、制作を続ける。ただし雨のため、最初に天幕の補強を行わねばならず、その作業にかなり時間を要した。また作業の進捗も湿度と雨によりやや遅れ気味である。

【7月4日】

参加者：学生26名、教員5名 場所：彫刻棟裏手

制作にあてる最終日であり、引き続き作業を続行した。

【7月11日】

参加者：学生30名、教員6名 場所：中央棟大会議室

造園家の中根行宏氏をお招きし、作庭に関するお話を伺った。中根庭園研究所の一員として、父の中根史郎氏とともに石選びや現場での作庭に当たる際の実感のこもった話を聞かせて頂いたほか、ロシアなど日本と自然環境が異なる場に「日本庭園」を作った際の経験などについてもお話し頂き、学生にとっても貴重な内容のレクチャーであった。レクチャー終了後は、先週までに制作してきた石膏4個によって空間性を生み出す課題の課題作品を見て頂き、コメントなどをして頂きながら受講生とともに見て回る時間も持った。【図16】



図16 中根氏による講評

その後、この先の予定について話し合い、課題の発展の方向を、受講者の希望に応じて2つに分けることにした。ひとつは、ここまで行ってきた石膏立方体の課題を引き続き行い、さらにそこに何か付加的な要素を足すことによって、より豊かな空間性につなげていくというものである。こちらの課題は、石膏を石に見立てるとすると、庭を構成する重要な要素としてやはり植生があるという事実を課題に取り入れようと考えたものである。もう一つの方向性は、やはり絵（平面）に落とし込んで考えてみたいという学生たちの希望を取り入れたもので、実際の風景に、風景を庭らしくする「何か」を付け加えたものをデッサンとして作品にするというものである。

【7月18日】

参加者：学生17名、教員3名

場所：中央棟共同講義室1

前回の決定通り、それぞれが制作に取り組んだ。

【7月25日】

参加者：学生23名、教員5名

場所：中央棟共同講義室1

2週前にいったん完成させた石膏の課題に、新しい素材を付け加えて統一的な空間を造ることが今回の課題であった。そもそも、基本的な立方体が直線的でかつ等間隔で並んでいるものを加工して、庭園などに見られる統一的な空間を表出するという条件の難しい課題であった。にもかかわらず、着色されたパウダーを幾何学的に塗布して4つの形に統一感を与えたり【図17】、模様をついた薄い素材を組み合わせで統一させたり【図18】、思い掛けない様々なアイデアが出された。また、使い慣れない素材に様々な道具でマチエールをつけながら、形の大



図17 茶色のパウダー状の素材で統一感を出した作品



図18 木目のある薄い素材を組み込んだ作品

小のバランスを与え、並べた時に退屈しない空間を造り、新しい素材を台座に使用するなど基本的な造形力を発揮する作品もあった。

■ 前期分まとめ

庭は自分たちがそのなかに身を置いてそのなかを移動する、またいわばそれに取り囲まれることがあると同時に、建物のなかなど、庭の外部といえる場所から一定の距離をもって眺められる対象でもある。構成要素も多く、植物のように姿を変化させる複雑な自然物も含む。言うまでもなく、季節や天候にもその見た目は大きく影響される。こうした複雑な対象から奥行き感覚について考えてみることは当初困難も考えられたが、石組みということを中心的な問題として取り上げることによって、そうした過度の複雑さを免れて、論点を絞って実践的な考察を行ってみることができた。換言すれば、これは庭を出発点としつつ、庭そのものというよりもそこから抽出した空間構成の課題だったともいえる。最後に、「要素の付加」というかたちで空間構成を庭に戻すささやかな試みがなされたともいえるだろうか。一方で、西洋の幾何学式庭園における空間の整理法と比較すると（もちろん西洋にも英国式庭園のように自然の複雑さを捨象しないものもあるが）、日本庭園における抽象度の高い要素（石庭や石組みなど）と自然を比較的そのまま取り入れたように見える部分とのバランスは、心理的にも視覚的にも奥行き感覚の創出に寄与しているように思われる。その感覚は、写真を使った最初の課題でも学生たちが極めて鋭敏に拾い上げて見せたものでもあった。また受講者に韓国人の学生もいたことから、西洋だけでなく韓国の庭園との比較についても考えてみることができ、その点も受講者にとって有意義だったように思われる。

3. 2019 年度夏期休業期間中研修旅行

表1. 研修旅行日程

日付	研修先等
8月27日(火)	ジャコメッティ《ディエゴ》熟覧 (豊田市美術館) →長野へ移動
8月28日(水)	諏訪大社上社本宮 諏訪市博物館 尖石縄文考古館 井戸尻考古館
8月29日(木)	浅間縄文ミュージアム 脇田和美術館 → 帰路

■ ジャコメッティ《ディエゴ》(豊田市美術館)の熟覧

本研究にとって中心的なテーマのひとつに、三次元ということで自明視されがちな彫刻作品の「奥行き感覚」がある。本作品《ディエゴ》は、ジャコメッティ作品のなかでも視距離によってとりわけ強い奥行きや、像の周りの空間性の感覚を与える。そのことはテーマ演習の初期(2012年)にも認識し、実見調査の機会を設けていたが、2016年7月のジャコメッティ展(上海)や同年8月のパリにおける近代彫刻作品の集中的な実見を経て、再度、とくに奥行き感覚の程度と視距離や照明(光)の関連性を検討しておく必要が感じられた。観察の結果、ディエゴの肖像に関しては、鼻先、顎、襟など、顔の周り、どちらかと言えば下部に空間が広がるように感じられた。また各パーツ(もしくは面)の角度のコントロールが、とくに胸と顔、鼻から額、顎などの各所で効果をあげており、面が受ける光によって奥行き感を強めるような「線」が浮かびあがるのも興味深い特徴であった。

今回の実見の結果、本作の重要性が再認識されたため、2019年10月にも、国立国際美術館で開催中の「ジャコメッティと」展に出品の《ヤナイハラ》との比較検討を行った。その検討と考察の結果は、稿を改めて報告する。

■ 縄文のバリエーションを知る 長野県内縄文土器作品の調査

同じく縄文土器も、当初から本研究の重要な調査対象とし、2016年5月よりとくに新潟県十日町市博物館の作例を中心に、その奥行き感の仕組みについて、観察や模刻の制作などを通して分析を行ってきた。刻線等による凹部と紐状の隆線とが、とくに胴部の表面の紋様から、口縁部や突起部の立体感の強い表現に推移していくその構造が魅力的な奥行きを生みだしている。とりわけこうした平面から立体へという変化の仕組みの複雑さが特徴的で、その制作プロセスについても模刻を通じて検討を

行ってきた。

一方で、特定の作品群のみを縄文土器の典型であるかのように扱うことも危険である。とりわけ、縄文土器にはあたかも言語や方言の違いのような地域に根ざしたバリエーションがあることも指摘されている。そのため、造形性から見ても興味深い新潟以外の作例として、長野県下の縄文土器の調査を行うことにした。

・諏訪市博物館

今回の調査で訪問したなかでは作例数は少なかったものの、《蛇体装飾付釣手土器》などは、新潟で調査した作例のように360度どちらから見ても同等に成立するタイプの作品とは異なり、明らかに（どちらが表かはさておき）表面と裏面といった感覚をもって作られており、180度観点を変えることで土器が示す表情が根本的に変化するという点が興味深い作例であった。また、釣手土器の機能についても見学者の間で様々な推測がなされた。

・茅野市尖石縄文考古館

《縄文のヴィーナス》や《仮面の女神》など、国宝の土偶を所蔵する館だが、それ以外にも浅鉢形土器など多くの優品をみることができた【図19】【図20】。新潟で実見し、本研究の一環として模刻を行った作例の多くが、具体的な現実のモチーフを想起させない抽象度の高いものであったこともあり、女性性を強調しつつ再現した土偶や、遺体の顔の上に伏せて被せられていたという解説を伴う浅鉢形土器（縄文後期）などは、縄文土器のもつ呪術性や象徴性など、我々が捨象してきた要素を突きつけてくる場所があった。しかし同時に、刻線と隆線（凹凸）の推移や、基本的な単位（ユニット）を成しているように見える紋様の配置法など、新潟の作例も含めて縄文土器に通底する要素もあるように思われる。

・井戸尻考古館

尖石で得た感想は、井戸尻考古館でさらに深まることになった。この館に収蔵される作品には、《水煙渦巻文深鉢》のように比較的抽象度が高い作例もある一方で、多くの作品に何らかの生き物を想起させる装飾や文様が用いられている。三本指をもつ半人半蛙と言われる文様や、諏訪市博物館でも見たような蛇頭を象った装飾、あるいは双眼と名付けられた、眼のような2つの穴をもつ土器などは、確かに生き物の存在感と呪術性を思わせるものであった。とくに興味深い仕組みを持っていたのが双眼で、片方の穴は貫通して向こうが見えるのに対し、片方は必ず閉じているという法則性を持ち【図21】、しかもそのことが奥行きを含む作品の視覚的効果に大きく貢献しているように思われたためである。



図19 《浅鉢型土器》(国宝) 尖石縄文考古館



図20 《釣手式土器》尖石縄文考古館



図21 双眼文様のある土器の数々
井戸尻考古館

・浅間縄文ミュージアム

同じ長野県内ではあるが、北佐久郡に位置する浅間縄文ミュージアムには、前日に見た作例とはまた異なる文化圏の作品群が収蔵されている。とくに浅間山麓から中信地方、群馬県にかけて分布する縄文中期の焼町（やけまち）土器をまとめて見ることができた。特徴的なのは、メガネ状とも穴のあいた貨幣状とも言える、平たい円盤のような文様を多く伴っており、とくにそれらが少しねじれながら複数接触している部分などには、面白い造形的効果を観察することができる点である。とりわけ胴部から口縁部、突起部へと、同じ基本形が大きさを変えつつ、しかも効果的な斜め方向の線による視線導入を伴って反復されていくことが、土器の周りを経巡って見ていく際に極めて大きな効果を挙げており、その複雑さと見事さには驚かされるばかりであった【図 22】。この館で見た作例は、比較的新潟との親近性が高く、今回の調査旅行では縄文土器に見られる表現の幅と共通項についてかなり認識を深めることができた。

以上、本稿では 2018 年度後期、2019 年度前期の活動報告を行った。繰り返しになるが、それぞれの調査対象に関する具体的な考察内容は、稿を改め、独立した報告書として用意する予定である。（深谷）



図 22 《焼町土器》(国重文) 川原田遺跡出土
浅間縄文ミュージアム

注記

なお、2011 年度に「モデリング」として本研究の出発点となるテーマ演習を立ち上げ、以後 2012 年度からは「奥行き感覚」と名を変えつつ長く継続してきたこのテーマ演習の「部長」でありエンジンでありムードメーカーであり、誰より深く美術を愛する中ハシ先生が、今年度をもって退任されることとなった。科研の最終年度となる来年度は、京都市立芸術大学芸術資源研究センターの研究員として本研究を継続されるが、これまでのテーマ演習ならびに科研研究のリーダーとしてのご尽力にこの場を借りて感謝の念を表したい。